「古代日本の気候と人びと」

吉野正敏　著
学生社，2011年11月，
198頁，2400円（本体価格）
ISBN 978-4-311-20342-8

これまで長年にわたって歴史気候学研究を推進し，この分野に関する多くの著作を刊行している著者の最新作である．関連する近年の著作としては，2006年に刊行の「歴史に気候を読む」がある（「天気」53巻10月号に評者が書評を掲載）．前著について著者は本書第１章において，「古代から現代までの歴史的な事件や現象などから比較的よく読み取れる事例について気候との関連を述べた．」と述べ，本書については，「今回は，古代に焦点をあてて述べるが，ただ時代を細かくしただけではない．」と述べている．

著者は，本書第10章において，歴史気候学の目的について，以下のように述べている．

○「歴史の転換には必ず画期がみられる．自然環境に注目して人間の歴史をみてもやはり画期が認められる．…農業生産・農耕技術・水問題・食糧問題・政治経済体制などを通じて現れる人間の歴史における画期は，…気候の変化傾向の画期とは年代的にはずれている．また，その過程も異なる．それを解明するのが著者の最終の目標である．」

○「最近特にこの10年来，環境史あるいは環境歴史学の必要性が指摘され，地方史研究において人びとの生活する空間・環境を具体的に明らかにする必要性が論じられている．この視点に立つ研究への貢献も本書の目標の一つである．」

既に，前著において著者は，気候と人間活動の関係について，以下のように述べている．

○「人類文化の変遷が，気候条件のみで説明されるものでないことは明らかである．しかし，歴史時代の人類文化の変遷に，気候条件がどのような影響を与えたかを知ることは必要である．人間が社会生活を営む場合，気候環境が重要だが，その環境条件が限界に近い地域ではわずかの条件の変化が，非常に大きな意味をもつ場合がしばしばある．」

○「地球規模で起る気候変動または気候変化は，人間活動とは無関係に地球が天体の一つとして存在するために起る．これが地域または局地的規模になる場合，人間活動との相互作用を生じる．つまり，地域スケール・局地スケールで人間活動との関係を考察しなければならない．」

このような目的意識のもと，著者は，本書をまとめた理由として，以下の５つを挙げ，特に⑤が最も大きな理由であると述べている．

①歴史学の研究では，史実の解明・解釈に際して，気候条件にふれていない場合がほとんどである．歴史的な人間の営みに気候が影響しないとするのは，理解しがたい．

②過去の気候の変化の形，地域的な広がり，時代的な特徴が解明されつつあり，日本についてもかなりの事実が明らかになってきた．

③18世紀から20世紀前半の寒冷な時代（小氷期）は，古文書・古記録なども多く，研究が進んでいるが，８～10世紀をピークとする温暖な時代については研究が進んでいない．

④“気候と人びと”の問題に対して，環境決定論であるという単純な批判がある．しかし，両者は複雑な関わり方をしており，特に古代には人間の生活が自然により深く・強く依存していたから，問題は扱いやすいのではないか．

⑤近年の地球温暖化と古代の温暖な時代は，その原因や，現象そのものもまったく異なる．しかし，温暖期における気候と人びとの社会の動きや，生活感情の動きなどには何らかの共通点があるのではないか．社会体制へのインパクトや人間生活などの予測に，参考になる事象があるのではなかろうか．

先ず，本書の目次を示す．

第１章　序章
第２章　古代以前の日本の姿
第３章　古代日本の気候と人びと
第４章　東アジアとのかかわり
第５章　東南アジアとのかかわり
第６章　南アジアはどうだったか
第７章　古代の自然認識と文化
第８章　東北地方の人びとの動き
第９章　地域スケールでみた気候と人びと
第10章　終章

© 2012　日本気象学会

本書では対象を日本としているが，目次からも明らかなように，著者は，対象を日本列島に限定せず，広くアジアに目を向けて，古代における人間と気候の関係を論じている．

第１章では，先に述べた執筆の背景と目的の他，歴史気候学に関する最近の諸外国における研究動向，さらに歴史気候学の基本的な方法論を述べている．第２章では，古代に先行する縄文弥生時代の気候と人間とのかかわりについて，「縄文時代は暖かく，弥生時代は寒かった.」，「温暖な環境がよく，寒冷な環境は悪い.」といようなきわめて単純な発想を反省し，「人間集団が，新しい気候条件下に新しい時代を切り開いた…切り開くことができた…と考えるべきであろう.」と述べている．例えば，稲作の北上について，気候の温暖化・寒冷化とイネの生成の温度条件を直結するのではなく，海岸線の移動（海進・海退）との関係も考慮する必要があると述べている．第３章は本書の中核をなす部分であり，３～10世紀の日本における気候と人間のかかわりについて，近年の多くの研究成果，例えば，屋久杉の年輪の炭素同位体比から明らかとなった約2000年の気温変化等をもとに，多くの課題（３～４世紀の日中関係，ヤマト朝廷の勢力範囲，遣唐使等々）について検討が行われている．さらに，古代の大土木工事と気候・自然環境問題の関係を論じて興味深い．また，「古代」の時代区分が，日本と西洋とでは異なることから生じる名称の問題についても注意を喚起している．第４章は中国並びに朝鮮半島における気候変動と人びととのかかわり方について，上海における自然災害と太陽黒点数の関係，中国人の自然観や占風術，渤海国と日本の交流等々の話題を述べている．第５章では東南アジアの気候変動と人びととのかかわりを述べている．前著でもインドネシアやカンボディアについて紹介していたが，本書ではより詳細に述べており，特に，アンコール朝の盛衰と気候変動（水利）の関連性は興味深い．アンコール文明について，「アンコール文明が成熟し，四方に拡大するにつれて，給水管理システムがますます複雑になった．長年のあいだにシステムが高度化し過ぎ，あまりに巨大で，いつまでたっても完全に整備できなくなり，モンスーン季の激しい洪水や干ばつに対応しきれなくなった.」という見解を紹介している．今日の世界から見ても非常に参考となる考えである．第６章はこれまであまり触れることの少なかったインド，スリランカ，北アフリカの気候変動について述べている．第７章では，古代日本人の季節感，古代の気候地名，風神・雷神，沙漠認識等々について述べている．気候地名における韓国地名との関連など興味深い．また，沙漠や乾燥・半乾燥地域を全く知らなかった日本人が，精神的沙漠認識，潜在的沙漠認識をどのように行ってきたか，興味深い話題である．第８章では特に東北地方に焦点を当てて，気温変動と古代の社会構造との関係を述べている．第９章では神話と気候条件の関係，古風土記の時代における気候の認識・記述（播磨の国や出雲の国における小気候分布等），伊勢神宮と風のかかわり，さらにヤマト政権と出雲・伊勢の気候条件の対比等を論じている．第10章では，先にも述べたように歴史気候学の目的・目標に関する著者の見解を述べている．

全体を読んで感じることは，前著と比較して，より学術的な面が前面に出ており，その意味では，古代の広域アジアをターゲットとした歴史気候学の総合報告と言える．歴史気候学の個別の課題について調べる際の，手引きとして最適であるばかりでなく，地球温暖化問題における地域気候に対する影響把握や古気候の研究に際しても参考となろう．

（(財)日本気象協会　藤谷徳之助）